

<連載(55)>

アルミ高速客船 「ニューうおしま」に乗る



大阪府立大学船舶工学科助教授

池田良穂

この3月に ひさしぶりに広島にある常石造船に出掛けた。常石造船の系列会社である神原海洋開発ではアルミ製の高速艇の建造を始めているが、その一隻である旅客船「ニューうおしま」の試験転に招待されたためである。実は、この船の模型船を使った抵抗試験や耐航性試験を筆者の大学の曳航水槽でやった関係で、実物が完成したらぜひ一度乗船させて欲しいと頼んであったのである。半滑走型の高速艇の性能に関する研究にも最近手を染めているので、こうした乗船の機会をできるだけ作るようにしている。

試運転の 前日の夕方に常石にあるリゾートホテル進藤にチェックインした。本連載でもすでに書いたことがあるが、このホテルは筆者の好きなリゾートホテルの1つである。瀬戸内海の島々に落ちる夕日がホテルの客室の窓からパノラマのように見えるその美しさはまさに絶景である。ホテルの下の海岸は、地方のウォーターフロント開発としては先駆的な境ヶ浜マリパークで、沢山の円柱が林立した浮体の水族館、ヨットハーバー、各種レストラン、鮮魚市場などがあり、瀬戸内海のデイクルーズに就航するクルーズ客船サウンズ・オブ・セトも停泊している。この船にも

すでに数回乗船している。夕日が沈む頃になると、マリパークにはイルミネーションで輝き、瀬戸内海の夜景の名所の一つともなっている。夏には花火も打ち上げられ、これにさらなる色合を加える。

翌日、 造船所の技術者と高速艇の性能に関する討議などをした後、いよいよ完成した「ニューうおしま」に乗り込んだ。この船は瀬戸内海の魚島村の経営する定期航路船である。船内はなかなか立派な内装で、生活航路の船もかなりの急ピッチでグレードアップが進んでいる様子が判る。

さて、「ニューうおしま」は造船所の棧橋を離れ、次第にスピードを増す。姿勢の変化はそれほど感ぜられないうちに、船はどんどんスピードを増している。高速艇のわりには振動も少ない。船体はアルミ合金で建造されているから、廃船後にもその材料を再び使うことができる。こうした省資源型の船が高速艇の分野などではこれからは増えていくのであろう。常石造船がこうした分野に積極的に進出していることには敬意を表したい。

「ニューうおしま」は順調に島々の間を縫うように快走して行く。なかなか軽快な走りである。

性能も所期の予想を上回るものとのこと。この頃から、筆者の興味は乗船している「ニューおしま」の性能よりも、むしろ、瀬戸内海の島々の造船所、そこで建造されている船たち、すれ違うカーフェリー、高速艇、貨物船などに移って来て、デッキを右に左に動きながら船の写真を撮ることに余念がなくなってきた。一時、すっかり元気がなくなっていた瀬戸内の造船所も、ひさしぶりの好況に活気が漲っていることが船上からもよく判る。

途中で、巨大なバルブを付けた漁船に出会っ

た。漁船にバルブを付けることがひとつのブームになっていることは聞いていたものの、これほど巨大なものは見たことがなかったので、まさに仰天してしまった。高速船では一般にバルブの効果はそれほど期待できないと思われるが、この巨大バルブであれば水線長さが3割ちかくは長くなり、抵抗の小さくなっていることであろう。しかし、この船の垂線長はどのように計られているのであろうか。そんな疑問を持った。

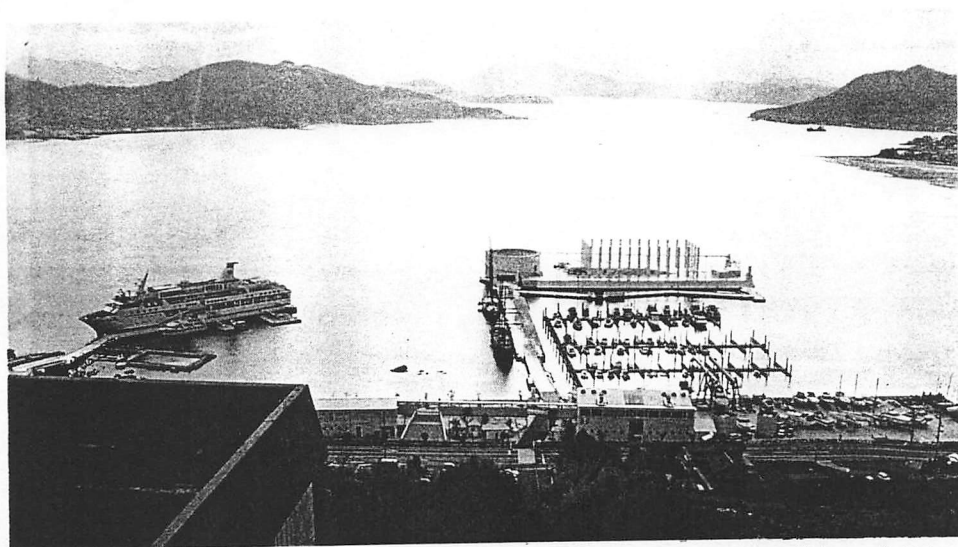
約1時間ほど「ニューおしま」の快適な走りを楽しんだ後、常石造船の岸壁に戻ってきた。



途中で見た巨大なバルブを有する漁船



神原海洋開発で建造された高速客船「ニューおしま」



リゾートホテル進藤から見た瀬戸内海の美しいパノラマ